
印刷所

村上 悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

印刷所

【Nコード】

N3472S

【作者名】

村上 悟

【あらすじ】

譲二の就職した印刷所は、いつも同じ名簿ばかりを刷っている。しかも毎月名前が増えて……

讓二が橋の上を歩いてみると、後ろから声をかけられた。

この暑さの中、スーツ姿で汗一つかいていない。讓二よりも頭一つ分だけ背の高い彼は、見下ろしたままの姿勢で低く声を発した。
「暑いですね」

「そうですね」讓二としては気温よりも目の前の男の方が暑苦しく感じるのだが、それは言え出せずにいた。男と一定の距離を保とうとする讓二に比べ、彼は少しでも讓二に近づきたいらしく、身を乗り出すようにして話を続ける。

「今日はお休みですか」

「そう見えますか？」

男は返答に窮した。平日の昼間、若い人間が一人で歩いている状況を解釈するには二つの答えしかない。一つは男が問い掛けた通り、平日が休暇の職にあるか。もう一つは職そのものに就いていないか。讓二は後者だった。一向に本題を切り出さない男を訝しく思いながらも、逃げ出すのは躊躇される。仕方なく、彼は男の話に付き合う腹を決めた。

「残念ながら、毎日が日曜日なんですよ」

「なるほど、職をお探ですか」

意を得た、と言わんばかりに肯いて、男は一枚の名刺を差し出した。

『高田印刷所 人事部 今井悟』

覗き込むとそう書いてある。今井は改めて、讓二の顔を舐めるように見つめた。彼の反応を見ているのか、それとも品定めをしているのか、讓二はあえて見つめ返すことはしなかった。

「印刷所、ですか」

「ええ、昨今はなかなかこういった仕事についてくれる方が居られないので」

その言葉で、条件が高いものではないことがわかる。譲二には取り立てて急いで就職する理由はなかった。しかし、その一方でなかなか職にありつけないことも確かだった。景気が悪いせいなのか、彼自身に問題があるのか、譲二にはまだ解決が出来ていなかったが、しばらく考えた後、譲二はこう応えた。

「近くに喫茶店があるんですが」

高速で回転する印刷胴を見つめ、目が回る思いをしながらも、譲二はそこから吐き出されてくる商品を真剣に確認していた。輪転機は一刻も休むことなく、回転を続けている。永遠に前に進むことのない車輪がかつての彼自身にも見えて、時折むなしい思いが込み上げてくることもあった。しかし彼は一心にその動きを見つめていた。わずかな印刷のズレ、汚れさえも見逃さないように。

毎分五百枚を刷り出す商業用オフセット輪転機は、型式こそ古いものの、まだまだ十分に現役と言えた。その証拠に滅多なことでは印刷物に汚れが付着せず、また印刷ズレもそれほど頻繁には起こらなかった。

ある段階で、譲二は輪転機を他の者に任せ、その場を離れた。休憩と同時に、刷り上った商品を確認するのだ。

検紙台に置かれた印刷見本を数部手に取り、休憩室に向かう。一部ではなく数部としたのは、刷りを比べて印刷精度を確認するためだった。

耳に響く回転音を聞き、紙粉やインキが空气中に散布される中では、とても長時間の連続勤務には耐えられない。彼らは二時間ごとに休憩を挟み、その度に交代を繰り返していた。最初に今井が言っていたように、望んでこういった職に就く若者が多いとは思えなかった。

休憩室のドアノブをタオルで包み、回す。中に入った彼は椅子の上に先ほどのタオルを敷き、その上に座った。こうでもしないと、印刷所はあつという間にインキだらけになってしまう。

なるべく汚さないように気をつけながらも、譲二の目は印刷物に向いていた。そこには多数の名前と数字、そして住所が印刷されている。一定の形式で、しかし、五十音順に並んでいるわけではない。月度と地区別に分けられた名簿だった。例えば、「平成十八年度三月該当者」と大分類があれば、その下に地区名が「江東区」などと記載され、さらにその下に個人名が並んでいるのだった。

譲二はこの名簿が何を表しているのかを知らない。表紙に使われている用紙が異なっているらしく、別工程になっているのだ。そして、彼はそれほど多くの仕事に携わるには、まだ経験が不足していた。

彼がこの印刷所に就職して半年、ようやく仕事には……輪転機には……慣れてきたが、その間に関わった仕事と言えば、この名簿の印刷だけだった。別部署では違うものも印刷しているのかもしれないが、彼は未だに他の冊子を見たことがない。

毎日毎日、同じものだけを印刷し続ける日々。

それは限らない退屈との戦いだった。彼にとってそれほど興味のある仕事でもなければ、条件のいい仕事でもない。やめるのは時間の問題だ、と彼自身がそう考えていた。

「田中、暇なのか」

現場主任が休憩室に入ってくるなり、譲二に声をかけた。わずか半年の職歴だが、それなりに勘は働く。主任がこう言って声をかけるときは、決まって面倒な仕事が舞い込んでくるときだった。先週には印刷物の汚れがひどかったからといって、輪転機の印刷胴を掃除させられた。彼一人でなかったのは幸いだったが、それでもいっも以上に汚れ、疲れる仕事だったのは確かだ。結局四時間、彼らは腰を屈めながら磨き掃除を続けたのだった。

「いえ、休憩中ですけど」

暗にすぐに仕事に戻るのだと言ったつもりだった。

「そうか、ならまだ時間はあるな」

しかし、現場主任にはそのような暗喩は通じないようだ。現場には言っておくからの一言で、彼はいつも以上に面倒な仕事に引き込まれる。

今日言いつけられたのは、印刷原稿のチェックだった。実際に印刷されたものと原稿が一字一句間違っていないかをチェックするのだ。依頼主から渡される原稿を輪転機用に転写する際に、極稀に印字の漏れや間違いの起ることがある。それを見つけるのだが、これが並大抵のことではない。頁にぎっしり埋められた文字から、あるかどうか分からない間違いを探す。しかもそれは何百頁とあるのだ。

元原稿と印刷物とを見比べる作業を何時間も繰り返す。もちろん一日だけでは終わらない。次の日も、また次の日も、彼はその作業を繰り返した。その上、現場主任が言い渡したのはその日に刷ったものだけではなく、半年も前に遡って確認せよ、とのことだった。

「やってられないですよ」

「まあそう言っな、誰もが通ってきた道だ」

愚痴をこぼす譲二を、先輩社員はそう諷めた。

「先輩も、あれ、やったんですか」

「やったよ。俺は一年分だ。お前なんか優遇されているほうだぞ」

「へえ、しかしなんだってあんな作業……機械でチェックできそうなものですよ」

譲二の言葉に、先輩社員は戸惑った。

「どうしたんです？」

それに気付き、譲二が問いただすように身を乗り出す。

「いや、そのな」

「なんです、言ってくださいよ」

「その機械、できてるんだよ。とつくの前に」

「え、じゃあなんで導入しないんですか」

「主任の親心というか、意地悪というか」

「はつきり言ってくださいよ」

つまり、こういう事だった。現場主任は新人が入り、研修期間が終わった段階で印刷原稿のチェックを必ずやらせる。それはいかに自分たちの仕事が精密でなければならぬか、間違いの許されない仕事であるかを覚えこませるためだという。機械を入れた方が早く、安く仕上がるのに、現場主任は必ずそうするのだという。

「へえ、なるほどね」

聞き終わり、譲二は妙に感心したような気持ちになった。厭らしいな、とは思ったが、それだけ自分が期待されているということだ。ようやく研修の期間が終わり、本当の仕事人として認められたということなのだ。嬉しさの反面、不安もあった。

「まさかとは思いますが、わざと間違いが入っていたりとかしいですよ」

譲二が懸念したのはそのことだった。自分が試されているのではないかという不安だ。

「それは多分大丈夫だと思うが……何かあったのか」

そう思うだけの根拠が、譲二にはあった。

「それが、名簿が毎月変わってるんです」

譲二がチェックしたところ、名簿の名前が毎月増えていた。その数はまちまちだったが、確実に増えている。それが何の名簿か知らない譲二には、不思議でならなかった。

「大体、普通、名簿って年に一回くらい更新すればいいものなんじゃないですか。なんだって毎月変更するんです？ 印刷代だって馬鹿にならないのに」

「いいじゃないか、お得意様なんだから」

確かに、それが何であろうと仕事であることには変わらない。彼らに与えられた役目は、それを印刷するだけのことなのだから。

しかし譲二は食い下がった。どうしても気になるのだ。

「これは、いったい何の名簿なんです」

先輩社員はもったいぶるように一度顔を俯かせてから、ゆっくりとこう言った。

「それは、俺も知らん」

程なく、譲二は元の印刷現場に戻ってきた。扱いは今までと若干変わっていた。単純に、一人前として扱われたのだ。その分、厳しくもなったが、譲二は嬉しかった。働くことの喜びを知った瞬間だった。

今日も彼は、休憩に向かいながら検紙台から印刷物を数部、手に取った。タオルをドアノブに巻き、汚さないように椅子に座る。今までと同じ行動、しかし違っていることが一つだけあった。

以前ならば、印刷の汚れとズレにだけ気を配っていた彼だったが、印刷物の中身まで気を使うようになった。原稿と照らし合わせる訳ではないが、違和感を感じることが出来るようになっていた。そういった部分を見つけると、彼は必ず原稿を確認する。すると、三割程度の確率で、間違いを見つけることが出来た。

椅子に座った彼は、最近いつもそうするように、印刷物をやや目に近づけて読んだ。一番左上から順番に文字を追っていく。その過程で、汚れやズレにもチェックを入れる。

その目が、ある所で止まった。

『平成十七年度八月該当者 江東区 田中譲二』

同姓同名、しかも住んでいる場所まで一緒だ。偶然、と捉えるよりも、これは本人だと考える方が自然だった。

背中を冷たいものが伝った。自分の与り知らないところで、自分の名前が使われている。その恐怖が、一気に体中を蝕んだ。しばらく、何も考えられず、同じ文字ばかりを見つめていた。何度読み返しても間違いはなく、それが変化することもなかった。

果たして、これは何に使われるのだろう。譲二は自分の存在が不

確定なものに思われてきた。職もなくブラブラとしていた頃、彼は自分の存在について疑問を持ったことがなかった。正確には「自分が存在しているのだ」という疑問を持ったことがなかった。

今、彼は職場で受け入れられ、自らもそれを快く思い、自分が必要とされている、存在を認められていると感じている。

その彼の存在を奪われたような気がして、怒りさえ覚えた。

弾けるように立ち上がった譲二は、ノブをタオルで包むことさえ忘れてドアを跳ね開け、現場へと向かう。

彼が探していたのは、現場主任だった。先輩さえ知らなかったことも、現場主任なら把握していて当然だ。

主任は、すぐに見つかった。輪転機のインク調整をしている。譲二は大声を上げながら主任に駆け寄った。

「主任」

「どうした、田中。まだ休憩時間はあるぞ」

「そうじゃなくて、教えてください」

「何をだ」

譲二は自分の持つ印刷物を示しながら主任に詰め寄った。

「これはいったい、何の名簿なんです」

主任は差し出された印刷物を眺め、その後に譲二を見た。

「印刷注文書にはこう書いてある」

彼が見せた用紙には「関係者配布用該当者名簿」とだけあった。

「それ以上は、私も知らん」

「そんなわけないでしょう」

不気味だ。自分の知らないところで何かが動いている気がした。

もし、取り消せるものならばすぐにでも取り消して欲しかった。すぐにでも輪転機を止めてしまいたかった。

「忙しいんだから、行くぞ。お前もそろそろ休憩時間が終わるんじゃないのか」

主任はそう言って、その場を立ち去ろうとした。

「待って……」そう言いかけたとき、譲二は自分の体が何かに躓い

て倒れていくのを感じた。

高速で回転する輪転機、そこに向かう自分の指先、周囲の叫び声。

外では人事部の今井が、忙しそうに小走りしていた。

「スカウトのついでに納品までなんて……人使いの荒い方だ」

その手には、譲二の刷った冊子が、完全な状態で持たれている。

表紙には「閻魔帳」と書かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3472s/>

印刷所

2011年4月10日10時10分発行